

津の国人

室生犀星

青空文庫

あらたまの年の三年を待ちわびて

ただ今宵こそにひまくらすれ

津の国^{うばら}兎原の山下に小さい家を作つて住んでいた彼に、やつと宮^{みやづか}仕えする便りが訪ずれた。僅^{わず}かの給与ではあつたが、畑づくりでやつとその日を過している男には、それが終生ののぞみであつただけに、すぐにも都にのぼりたかつた。けれども衣服万端の調度にと欠いている彼に、どうして道中のいりようを作つていいかさえ、見当の立たないものがあつた。自家の畑物をみんな食べてしまつてゐる哀れな夫婦に、手の尽^{つく}しようない貧乏が永い間くい込んでいた。

月のいい夜であつた。一束の白い菜をかかえた夫は、簀^すの子のうえに白い菜を置いたが、筒井^{つつい}はそれがどうして手にはいつたかを尋^{たず}ねるには、あまりに解り切つたことだつた。

「固く塩せよ。」

夫の顔は気色ばんで、少し昂奮しているようだつた。

筒井^{しとみ}は蔀^{しとみ}をしめに立ち、男は誰かに弁解するようにつた。

「あまり月がいいものだからつい、……」

「^{もつと}尤もにございます。」

「白い茎が一面にならんでいてそこに射^さす月の光じや、我を忘れて白い菜に手がふれた。」
「烟物に月がさしたらそれはみな仏の座のように申します。それに、間もなく宮仕えに発^たたれるあなたさまに、誰が何を申しましょうぞ。」

「では固く塩して？」

「はい。」

妻の筒井が白い菜をかかえて去ったあと、彼は手にふれた白い菜の冷たいゆたかさをたなごころに再び感じた。誰があんな美しさを辞退することが出来よう、花もそうであるし、こがねいろをしている橘^{たちばな}の実もそうであった。きしむような白い菜の幅の広い茎は妻のただむきのように美しかった。決して辞退できるものではない、彼は薔^{しとみ}の破れから、もうもうとこめる秋夜の月を眺めやった。

宮仕えすればいまより収入があり毎月妻の筒井に送り、筒井はその黄金で衣裳をととのえ、一年も経^たてば夫は都から迎えに来るはずだった。四^し条五^ご条の秋色はどんなに華やかなものかも知れない、築^{つじ}地の堀^{へい}をめぐらし、中の島をしつらえた広大な庭に、彼は好む樹

木を配して子供の時から庭が作って見たかった。桂うちぎを着けた妻は、几帳きちようの陰で長い黒髪を解いて匂におわすであろし、筒井にそういう高い生活をあたえれば直すぐにも美しくなる、彼のそんな考えは妻を可憐とも美しいとも、いいようのないものに思わせた。筒井の持つ宝物のようならだは、誰にくらべても、見劣りのするものではなかった。それに天稟てんびんともいふべき筒井の言葉づかいの高雅なことは、高い官についた人の次女であることをおもわせ、卑賤ひせんのそだちである彼に勿もつたい体ないくらいのものであった。いままでも、白い菜のほかに、彼は畑物を掠かすめなければ、たつきに趁おわれがちだった。或る夏の夕方には、布片一枚を畑物を掠めた償つくないに畝うねの上に置いてもどったこともあれば、若干の金をも眼に立つところに置いてただで掠める野のものでない証左としていた。しかし窮乏はもう布片ぬのも、若干の金をも畝の上に置かせなかった。

筒井は或る官人かんにんのもとに働くように手立てをしたが、低い官人ゆえ、ただそこで衣食するだけであつた。いま彼の心をいら立たせるものは妻の衣食するところを見付けること、そこで少時待ってもらふことだった。筒井もそれは承知のうえだった。話は筒井はいつからでも低い土地がかりの官人に仕えることに決り、もう彼の心労はなかった。筒井は賑にぎやかな笑いをたたえ、せめても、それが面白いことであるようにいった。

「おなじ時刻にそれぞれに立ちとうございます。あなたさまは都へ、わたくしは官人のもとにこの家を一緒に立ちたい考えにございます。」

それはなにか気懸りな話ではあったが、そういう申出では愛情のおもい遣りが香のように匂うてくるようでもあった。筒井はいつでも、そんなふうに申し出ることですぐれているものを持っていた。

「一人がこの家にくることは心辛いものがある。それはいい考えだ。」

「そして渡舟まで一緒にまいりましょう。」

津の川の渡舟は東と西にわかれていて、東にのぼれば都への渡舟だった。流れを下れば土地がかりの官人の村に着くよう、渡舟はしかも同じ時刻に出るはずであった。

彼はなになしその企の思いつきに笑った。一抹のにぎやかさがどういう困苦のなかにいても、いつも笑いを見せる筒井らしい終の美をとどめるに似ていた。しかも、そんな筒井の考えにはこの家を売るのに都合のよい立退の仕儀にもなり、道中衣裳の費用にも役立つのであった。彼はそこまで考えることが出来ず、うまく暗示した筒井のいかにも自然らしく、品の高い、言葉の意味がやと分るほどだった。

津の国に来たときも渡舟であった。まだ子供だった彼は渡舟のへりにいて青ぐろい水の

底を見て怖^{こわ}がった。しかも筒井を迎えに行つた春の渡舟に、つやのいい御車^{みくるま}の牛^{うし}が一頭乗せられ、ゆつくりと船頭は櫓^ろをこぎながら、皆さん大声を出さないでくれ、牛が喫驚^{びつくり}すると川にはまるから頼みますぞと呶鳴^{どな}つた。しかも、筒井と彼の乗っている舟とすれすれにこいで行つた。筒井は彼に身をすりよせ、しきりに氣を揉^もんでいった。

「牛が川におちたらどういたしましょう。」

「そんなことは万々ござるまい。」

町家の女のつれている子供が突然怖^{こわ}がつて大声に泣き出した。船頭ははらはらして叱^{しつ}々と注意をし、母親は子供の口を手でふさいで、泣くと牛がびつくりして川に落ちるぞという、子供が一層大声になり、怖がつて泣き出した。その時、筒井の手がしずかに伸べられ、子供の怖がる眼路^{めじ}をふさいだ。伏見^{ふしみ}あたりでできる、衣裳の美しい小さい人形であつた。

「これ、たまうぞ。」

子供は泣き歇^やみ、舟中ではことに美しく榮^はえる人形を抱きよせた。この女らしい優しい思いつきは舟中の客の胸に、いしくも温かい思^{おも}いをもさせ、牛を乗せた船頭は感動していった。

「助かりましたぞ御娘おむすめ様。」

筒井は謙遜けんそんらしく頭つむりをさげて見せた。彼はこの妻の仕儀にほとほと感銘したが、舟中のこと故、それはよい思いつきだといったきりであった。

牛を乗せた舟は川の中心に出てゆき、船頭は櫓をあげて筒井にもう一度、お礼のような形を取って見せた。舟中の牛の背中にある白い斑点ふちがやと見えるくらい遠のいた時分に、男は乗客に聞えぬ低い声でささやいた。

「よく致されて我ら面目を施した。」

匂におやかな新妻はやと笑って見せただけであつた。

「人形はよい人形ではなかつたか。」

「母のかたみにございます。」

十七で母にわかれた筒井は、その年から三年経つたあと、父に死別していた。

「そんな貴い人形を惜しいことを致された。」

「いいえ、牛が哀れにございます。それにあの子供もみめ美しゅう覚えましてから惜しいことはありません。」

渡舟が土手に着くと筒井は津の国の土をはじめて踏み、柔らかい春早い草々の頭にはも

はや先の美しい緑がもえていることを知った。そして、それは何と夥おびただしい蘆あしの繁しげりであつたろう、それらの蘆にはもう青い液状の緑がのぼりかけていた。

例の牛は土手にあがると、のそりのそりと曳ひきこ子と一緒に歩いて行つた。白の斑ふち点はまるで雲のように鮮やかだった。

「津の国はよいところでございますね、水が多いので景色が美しくおぼえます。」

かくて彼らは五年の月日をこの津の国に送り、男は下の役を解かれてからきようですに三年経っていた。

その渡舟でおなじ時刻に別れるのも、なにか宿縁のようなものがあつた。彼らはもう売る物も、人に頒わけるものもないほど、すべてが衣食についてやされたあとだったので、家を立ち退くには雑ぞうき作はなかつた。筒井は青い下帯を彼にいつも永くしめてくれるようにいい、見れば筒井がはじめての夜にといった匂におやかな青い下帯だった。永い五年のあいだについて見かけたこともなく、大切にしまつて置いたものらしかった。彼は秘蔵の品に手をふれるように青い下帯を撫なでさすりながら、珍らしい物をいままで蔵しまつて置いたものだといった。「何となく蔵つておいたのでございます。お別れのかたみになるなぞとは、つゆ覚えませ

ぬのに。」

「我ら何も遣^{つか}わすものもない。」

彼は立つてみ仏のおわす扉をひらいて、小さい唐^{からわた}渡りの釈迦^{しやか}仏^{ぶつ}を一体取り出した。それは耳の中にでも、しまい込まれるほどの小さい御姿をうつしたものだ。黄金^{こがね}でつくられた、彼の一つの高貴な宝物にぞくすべきものであつた。

「父からのかたみでこれだけは残しておいたもの、再^また会う日に返してくれればいい、我らのかたみにしまっておいてくれ。」

「これはあまりにわたくしごときものには勿^{もつ}体^{たい}のうございます。」

「いや、我らが持つていてはどうなるみ仏の行末であるか分らぬ、そなたならそんな不^ふ束^{つつ}はあるまい。」

「ではおあずかり申します。これは何とお美しいお顔にございましょう。」

燦^{さん}とした黄金づくりのお顔のこまやかな刻み目にも、もはや古い埃^{ほこり}がつかやをつくつて沈んでみえ、筒井は両のたなごころに据^すえてしばらく、じつと拝するがごとく見^み惚^ほれた。そんな敬^{けい}虔^{けん}な筒井の眼のつかい、手の敬^{うやうや}々しい重ねようはこのみ仏をまもるには、筒井より外にその人があらうとも覚えなかつた。彼は筒井の嬉^{うれ}しそうな様子に信頼する強

いほとぼしりをその眼のなかに見入った。

「よくは覚えぬが母が父のもとに見えたときにお持ちになったものらしい、母がよく埃をはらい御み^{おん}がきをかけておられたことを覚えている。」

「母上様におことわりを申さなければなりません。」

「そなたが肌身^{はだみ}離さず持つていてくれることは、母上にもきつと御本望でござろう。」

「あまりに不束^{ふつつか}にて恐れ入るばかりでございます。」

筒井は父母の位牌^{いはい}の前に行き、額^{ぬか}ずいて永く頭をあげずに禱^{いの}りの時をつづけた。それは親しいものの限りをつくした、見ていても、心に重みのくるような礼拝のよろこびをあらわしたものだつた。

その夜、はじめての時雨^{しぐれ}の訪ずれがあつた。二人はだまって灯にさしむかえになつたが、やがて彼は別れたら必ずきょうの日をおたがい心して覚えて置き、便りはつでのあることに怠りなきように筒井に注意した。

筒井はその時はじめて勁^{つよ}く語調をあらため、彼の腹にこたえるように申し出たのであつた。それは思ひかけぬ言葉の剛直さをあらわしていた。

「あなたもわたくしあることをお忘れなきようにお願いいたします。」

「そなたもだぞ。」

「わたくしのことはお心にのこさずにどうぞ。」

「いや、土くさき田舎暮らしでは気がかりにもなる。」

「美しい人のたくさんおられる都のたつきこそ、わたくし恥かしながら心がかりに思います。」

彼は何となく男の本能から悸^{ぎよつ}乎とした。美しい人びとの往来する朱雀^{すざく}大路^{おおじ}を思うだけでも、永い間田舎に住んだ渴^{かわ}きがそこで充たされそうであった。そういうたまゆらの悸^{おもて}乎としたものは再び彼を捉えて、面をくもらせるほどであった。

「都では我らを対^{あいて}手にしてくれる者とてもあるまい。」

その夜はかつてないほど多くのしみじみした話が二人のあいだにあった。男も凡^{すべ}てを信じてはいたが、ひとなみの気にかからぬほどの不安があった。そのあるかないかの依りどころない不安は、いままでの、どういう不安にくらべても大きいものだった。

二、三日の後、晴れた日に彼らは別れの宴のようなものを催したが、赤の飯を炊^たこうとしてもその年の虫の害は、畑に小豆^{あずき}というものが一粒も実らなかった。隣近所に男は頼みに行つて見たもののおよそ小豆と名のつくものは、依然、一粒もなかった。ただの小豆で

はあつたが幸^{さいさき}先を祝うものゆえ、夫の失望は大きかった。小豆の飯の好きな夫に、そのわかれの飯に小豆を混^{まじ}えないことが筒井にも悲しかった。

「どこの家にも一粒もない。」

夫は素晴らしい、せめて鉈^{なた}豆^{まめ}のようなものもないかと尋ねてみたが、これもやはり一粒もなかった。それほど恐ろしい暴風のような蝗^{いなご}の大軍の襲うたこの地方では、青いものも後^{あと}蒔^まきの分だけがそだったただけだった。

筒井はどこやらに小豆が戸棚か、どこかにしまわれてあるような気がして袋戸棚や茶棚をさがして見たが、どこにも紅^{くれなゐ}をした小豆は見当らなかった。

「もういいではないか。」

「いいえ、たしかにどこかに、小豆があるように覚えがございます。ちよつと、わたくしに考えさせて下さいませ。」

どこかにしまつてあつた。筒井は心覚えのあるところを捜して見たが、どこにも見付けられなかった。だが、この遠いような近くにあるような考えはどうしても諦^{あきら}めかねるほどの、心にのこっている小豆であつた。

「ええと、どこかにあつた。」

彼女はその時、やっと考えあてて、膝を叩いて小さいよろこびの声をあげた。男は驚いて筒井の顔をみた。

「ございました。」

「どこに。」

「只今持ってまいります。」

彼女が立つて行つたところは雛のしまわれてある箱をつんだ戸棚だった。そこにある幾つもの箱のなかの別な小箱をかかえ、筒井は夫の前に置き、鋏を用意してふたとび、箱の前に坐つた。不思議そうに見ている夫の前に箱から取り出したのは、五つの袋からなる美しいきれで縫つたお手玉だった。

「ほら、小豆にございます。」

袋の糸目をとくと、なかから美しい紅のつやを持ち、芽割れに白い縫糸を見せた小豆が一杯につまっていた。雛の日の娘らのあそぶお手玉だった。

「これは有難い」

男は驚いてこれに気のついた筒井の智慧に、いまさら眼を見はる気持だった。五つの袋を解いてしまった時に、盆の上には夥しい小豆が一杯にあふれていた。しかも去秋の小豆

は一粒として傷^{いた}んでいず、去秋の美事^{みこと}な近年にない豊作のあらわれが、この小豆にさえ見られた。

「これで赤のご飯が出来ました。」

彼女のよろこびは彼女をなみだぐませたほど、真剣なものだった。こんな遊びに縫ったものに、祝いのものが炊かれようとは、誰も知らなかった。ただ筒井の叡智^{えいち}だけがそれを教えたのだ。間もなく赤の飯はふつくりと炊かれ、小豆は赤ん坊のようにあどけなく柔らかく蒸^むれて、あまい、淡^{あつ}さりした餡^{あん}の深い味^{あじわ}いを蔵^{あづか}っていた。かれらは、明日は別れなければならぬひと時の食事に、塩した干^{ほし}魚^{うお}をかじりながらも幸福だった。小豆があつたからには我らは永く倖^{しあわ}せになるだろうと男がいえば、女はお手玉の五枚のきれを町^{てい}重^{ちよう}にたたんで、そしてあやまるようにいった。

「小豆を見付けましてまたしまつて置いてやります。」

この何者^{むか}に対^{たい}つていうでもない礼儀ある言葉は、こんな日にことさらに心に応えるものがあつた。かくて貧しい埴^{はに}生^{ゆう}の宿のひと夜を彼らはゆつくりと睡^{ねむ}るべく、寢所^{ねど}にさがつて行つた。そとは深々としたしぐれが罩^{たちこ}めるように降りつづいていた。

津の川波は鱗がたの細かい皺を見せ、男の古い狩衣には少し寒いくらいだった。青い下帯をしめた彼は渡舟を待つあいだ、筒井と土手に腰をおろして憩んだ。同じ古い桂に釈迦を懷中に秘めた彼女は言葉すくなく夫とならんで、かぞえ切れない鱗波の川一面にある文様を見入った。

渡舟は同時に東と西からその姿をあらわし、この岸べに着くと同時にまた立つはずであった。筒井はなにもいうことがなかったが、人はこんなふうにして別れるものであること、すこしも行末のことに愁いをもたずにいることが甚だしい間ちがいではなからうかと、そんなことを漠然と波を見入っては考えていた。一体、こんな寒々とした少しの温かみのない曇り日の景色というものには、どうしても隠しきれぬほど惓惓しい感じにとらえられるものであった。先刻から夫の顔を見ただけ見えないようにつとめていたのが、ふいに見るでもなくその横顔を見てしまつて、なにか驚くようなはつとした気持であった。茫やりとなじ水の面を眺めている夫は何を考えているのか、少しも生氣というものがなく顔は青みをふくんで淋しい以上の淋しい感銘であった。こんな虚しい何も浮んでいない顔を見たことがはじめてだった。どんな困窮の日にもこんなさびしい顔色はしていなかったのだ。もう、別れるからだろうか、そうとしか、筒井には解きがたい空虚さであった。

渡舟は同時に着いて乗客をすっかり吐き出して終うと、舳へさきを上流と下流に向けてふたたび客を乗せた。

「さあ、」

男はなんとなくそういつて起ち上り、女を先に立たせた。

「では氣をつけてな。」

「はい、おしずかにお越しくださいます。」

筒井は腰を折つて一揖いっしゅうした。男もちよつと頭をこころもち下げるようにして、それぞれの渡舟に乗りこんだ。筒井は夫の顔を先刻のようにもはや見ることはなく、夫の烈しい眼がしらを受けるだけであつた。

渡舟はぽんと岸辺をついた竿さおの勢いで、水の面にすべり出た。筒井の渡舟は西の方に舳へさきを向け、男の渡舟は東の上流に向いて舳を立てた。二人は眼を合せて合図のように頭を下げ合ったが、下流に向う筒井の渡舟は俄然がぜんとして舟脚ふなあしを流れにまかせて、もう、かなり距へだたつて行つた。それはわざとしたような迅い舟脚はやで、はなはだ卒氣そつけないものであつた。それにもかかわらず上流に逆のぼつてゆく遅々たる舟脚は、しかも下流に向いて坐っている男には永い間、筒井の渡舟が眼を放れずについて来てならなかつた。

「あの女にはもう再度と逢えないような気がする。」

男はなんとなく口のうちにそう自分自身に對つてはつきりと言ひ聞かさなければならぬような気がした。それほど荒涼無辺なところに彼の直覺がはたらいて行き、彼はそこで急激な絶望をありありと感じ出した。女の乗った渡舟はそれでもまだ眼路の果にあつて、一つの黒い点になったかと思うと川すじが迂曲して、突然見えなくなつてしまつた。彼はその時あまりに熱心に見つめていたため、頭がしびれたようになってもう少しで渡舟のへりから落ちそうな不覺をおぼえたのであつた。そしてそういう不覺の感じは一層彼から彼女を失ささせる、變な暗示のようなものをその心に殖やして行つた。貧しくとも津の村ざとにあれば白い菜をたべていても、彼女と一緒にいられるではないか、彼女を失うてしまつたら再びああいふ女は自分のところに来てくれはしないであろう、彼女を失うために彼は都にのぼつて行くようなものだ。彼の焦燥は彼のなかに荒れ立つてゆき、彼は身動きもせずに愉しい五年の月日をあとぐりし、それにふたたび逢えなくなればどうなる自分であろうか、筒井がいるために貧窮すら応えず、そして彼女がいたために多く掠めた烟物の咎は、百姓だちから許されていたようなものだった。何と多くのかない百姓だちが筒井をただひと眼見るために、まずしい彼の家の垣根越しに声をかけて行つたことであろう、

かなしいそれらの百姓に筒井はみんなとおなじに均ひとしく良い挨拶をあたえていた。そして青い川波に眼をおとして茫然自失するような状態をつづけて行つた。彼はくるしげに、こゝういつてもう恥をわすれているようだった。

「ねえお前、なにか答えてくれてもよさそうなものではないか。」

この急激におそつた哀別は、男をふたたび茫然自失のあられもない世界に趁おい込んで行つた。自分にすぎた筒井であつただけ眩まぼゆいばかりの妻を得ていることが、どういふ倖しあせにも増して底の深い倖せであつたことであらう。かなしい働くだけでつかれた百姓たちは、垣根越しに声をかけて過ぎた。

「筒井さま、こないいお天気にはわしらは働くより外に考えようがないとは、これは一体どうしたものでしょう。」

「お百姓衆、わたくしとてもこないいお天気には遊ぶことなぞゆめにも覚えませぬ。あなた方はおはたらきになる土地をお持ちになるが、わたくしは作るにも種子も土地もございませぬ。」

「なるほど、わしだちはとんだ間違いを考えたものや、では、あとで種子をおとどけ申しましよう。」

すなおに百姓は会釈して去った。

男はそんないい妻と自らえらんで別れるのだが、もう一さいが遅すぎた。もはや、渡舟さえも見えなくなり、男は齒をくいしばってうつ向き、人に顔を見られぬように啼り泣きをした。白い妻のただむき、うなじ、それらにこそ、男はわかれて後にあえぬことが深い悲しみになった。人はおなじ白いただむきを世界にもとむべきものではなく、そんな貴いものはあちらこちらにあるものではなかった。

土地がかりの官人^{かんにん}の家は、広大な石垣をめぐらした川べりにあった。筒井はすぐ見出されて仕えの女のなかでも、重い地位をあたえられ、奥の仕えばかりを勤めることになっていた。主人は津の川べり一帯の土地を持ち、息子はその父の管理している土地の手伝いをしていて、まだ若い光った額をもった青年だった。この青年は筒井が仕えをつとめるようになった最初から、筒井に心して使うようになり、あまりに町重^{ていちょう}なあつかいに困るほどであった。食物、睡眠、衣裳、暖かい庭、暇のある勤めはたちまち筒井を美しくふとらせ、毎日の沐浴^{もくよく}はつやつやした肌^{はだ}に若返らせた。筒井はこういうゆとりのある生活をしたこともなければ、また、かつて一度も想像したこともなかった。これが仕えの勤めであると

すれば、こんな安易さはほかに求められるものではなかった。ふとしたことから第二番目の娘子むすめごに、筒井はその和歌の出来を見てやってから、青年は一層筒井をたいせつに応待した。朝の白湯さゆ、昼下りの白湯にも、筒井は呼ばれて、主人、娘、息子の端の座にすわっていた。やがて主人が去り娘が去つても、息子は後始末をする筒井に、そこにいよといい、ふたたび白湯をいれさせた。息子はよくするように眩まぶしげに筒井を見遣みやつて、尋ねずにいられぬふうにいった。

「あなたはいままでに何をしていたられた方か。」

「名もなくはたらいていた普通の女にございます。」

筒井は男と暮らしていたことは、女としてはいえなかった。

「どういうところにはたらいていたられたか。」

「津の村の方かたにございます。」

「何をしていられる方？」

「官の職をのいていた方にございましたが、再び都にのぼられた方のお家につとめていたのでございます。」

「よい方であつたか。」

「はい、それはもう。」

筒井はともすると変りやすい顔色を心で隠すようにした。男が立ってからもう三月になるが、便りも消息もなかった。三月といえは百日に近かった。あれほど誓いあいながら何の知らせのないのは、官の仕事になれないためであろうと、そう思うよりほかに筒井は解きようがなかった。十月十一月十二月も終り近く、あと二日でもう正月になろうとしていた。

「父上もそう申されていられるが、この家に永く勤めていられるようお願い申す。」

「わたくしごときものでお宜よろしいようでございましたら、永くおつかい下さいませ。」

「みな近くの農家の者ゆえ、あなたがそれをつかいならしていただきたい。」

「はい。」

二日の後、静かな元日がおとずれた。筒井のために作られた衣裳はまるで御娘子と同じ模様の襲かさねも青い練絹ねりぎぬであった。筒井はそれを携えた御娘子に辞退して、押しやって勿もった体いながった。

「わたくしはただの仕えのものでございます故、これだけはお受けできません。」
生れてはじめて見る美しくまばゆい初春の衣裳であった。

「いいえ、これは父上と兄上がお見立てであそばしたものの、正月には着てたもるように。」
それはもう断れない身丈もきめて作られた衣裳だった。

元旦の朝の餉かれいには、筒井は主人といつしよの座にあてがわれ、ひじき、くろ豆、塩した鯛たい、雑煮ぞうじ、しかも、廻まわつて来た屠蘇とその上の盃さかずきは最後に筒井の膳ぜんに来て、彼女はこういう家族の待遇に心ときめきながら、優しく盃を受けなければならなかった。しかも穏やかな微風みづかぜすらない元旦は暖かいほど、庭一面に日があたり、不意に大きな翼の音がして一羽の大鳥がさつと庭ぞらを掠かすめて渡つて行つた。

「あ、鶴じゃ。」

主人は盃を持ったまま簀すの子に出、青年も娘も出て行つた。真白な大鶴がななめに中の島をよぎり、低く庭の上をすぎて行つた。筒井はそのまま腰をまげてかがみ、かがんだときに微かすかではあつたが、大きないかにも温かそうな白い鶴のうしろの翼を見受けたのであつた。

みな座にもどつた時に誰の胸にも、筒井が坐つたまま謙遜けんそんに鶴を見送つていた落着きをこよない静かさに感じていた。そしてこの時代の礼儀の言葉としての筒井の言い方にも、このあたりに稀まれに見る女の気高さがこめられてあつた。

「御めでたい鶴にございます。」

「ありがたい、そなたという鶴もいてくれて双鶴そうかくじゃ。」

主人はそういう息子をちらりと見た。青年はべつに気色けしきばむことはなかったが、機嫌のよい頬の色をしていた。そして彼は少しあらたまつていった。

「母上がいられぬものだから父上も不自由していられます。」

「お亡くなりあそばされたのでしょうか。」

「もう二年にもなります。」

青年はそれだけであとはいわなかった。

「存じませぬことながら失礼申し上げました。」

筒井は手について悼いたみの言葉をのべた。父という人は満足げにその言葉を受けて、軽く頭をさげた。

「母のない家というものは灯火ともしびを失っている居間のようなものだ。そなたがいてくれてめでたい元旦をことほぐことができた。」

「わたくしこそこのようなおうたげに列つらなりをいただき、お礼の申しようとてもございませぬ。」

「ゆるりとされるよう。」

「ありがとうございます。御衣裳もいただきましてございます。」

愉たのしい夜は雪にもならず、みな歌をものして過ふごし、更けて筒井は下くだろうとして仲の遣戸やりどをあけようとすると、よい月夜になっていた。

誰どなた方様。」

筒井は小さい肩をすぼめ、身をまろうとすると、狩衣かりぎぬを着た青年が立っていて、隠れもせずに行った。

「よい月夜になり申した。」

「はい、思いがけないよい月でございます。」

青年の顔は真白だった。筒井はこういう月をあびた男の顔を見たことが初めてで、驚いて見直したほどであった。

「明日はみ社やしらに詣まいろう、御身も見えられるように。」

「はい、お供させていただきます。」

筒井はふと思いいでて、ほかに物の言いようもなく、

御おん襲かさねいただきお礼もまだ申し上げないでおります。」

彼女は襲に手をさわり腰をかがめた。春の野の萌黄色もえぎいろの襲は月の下では、ひと際きわ、柔
らかい触りさわを見せていた。

「お似合いでよかった。桂うちぎもそのうち吩咐いいつけます。」

「わたくしごときものに御心労おそれ入ります。」

「妹ともよく似合のものをお捜しあれ。今宵こよいのお身はまことに美しかった。」

「そのようなこと仰せおおられては、ゆめなりませぬ。」

筒井はなんとなく硬い顔付になった。心に恐ろしい脅えおびがあつた。その脅えははなはだ
道徳的なものだった。

「そなたが来てくれてから父上も大變元氣になられたし、我らも息を吹き返した思いを致
している。こういう辺土にいて母のいない家というものは、身に着けるものも見当らないほ
ど淋さびしいものでござる。」

「お察しいたします。」

「それに川べりの冬は寒く氣も沈むようなことが多い、そなたが見えられたこの冬は賑にぎや
かに歌など夜々のなぐさめに、ものそうではありませぬか。」

「嬉うれしくぞんじます。」

青年の顔色は青く寒げに見え、筒井は一種の願い事のようにやさしくいった。

「お風邪召すといけませぬ。そこまでお見送り申します。」

筒井は先に立つた。

「お見送りはおそれ入る。」

「また明日という日のおとずれもございますゆえ。」

こうまで優しい申し出には青年の熱い気持も、そのまま心におさめ、今宵は引き取らねばならなかった。西の対^{たい}で二人はしずかに別れた。

「筒井殿、我らこころよく寝^{やす}みますぞ。」

「おしずかにお寝みあそばせ、ご覧^{ろう}じませ、あんなに明日はよいお天氣のきざしにございます。」

「美しい星だ。」

星は冬が深くなるほど冴^さえて透^{とお}つて見え、美しくなるものだった。男は戸のうちにはいり、筒井はおのが部屋に引き取つて行つた。

筒井はきょうひらけた世界に向い、自らきびしく責める気持を経験した。避けるべきものは避けなければならぬ。筒井は寢所にはいるとおのずから自分の呼吸^{いき}づかいの若さを知

り、そしてこがねのみ仏の像を抱いた。寸にも足らぬものであつたが、男もこの中にいると思わずにいられたかつた。おん肌をまもらせたまえ。

「おん肌をまもらせたまえ、あわれなるものの肌をまもらせたまえ、わがあやまちなきようめぐみあらせたまえ。」

筒井はこういう^{いのり}禱に似た声もひくくささやいて見ると、晴れがましく明るい気持になりからだが真白にかがやくようで、^{もったい}勿体ないみ仏の光をうけるような世界のあたらしさを感じた。そしてそれは無名の青年があらわれたことによつて、この世界のひらきかけたことも知らなければならなかつた。

秋はふたたびめぐつて二年目の正月になつても、都から男の便りがなかつた。筒井は津の川べりの渡舟を待つあいだにちらりと^{ぬす}偷み見た男の顔の、あまりに空しい生気のないので思い出すと、もう生涯会えない人のような気がした。たとえ、どんなに忙しい生活をしていても一片の便りを書くくらい暇があるはずなのに、もうまる一年も何もいつて^よ寄越さないのには、深い原因があるに違いない、その原因とは一体何であろう、筒井はその一つは死というものに^{とら}捉えられた彼ではなからうかと思ひ、も一つ外の原因にはなつた

く別の女おんな気を感じた。だが、そういう浅薄な人ではなかったはずだ。それでは死か、死ぬような人でもない、もしそうであつたら誰からか知らせてくるはずであつた。やはり女であろうか、筒井はそれも信じられぬことに思われたが、ああいう変に気の好人というものは自分で確しつかり乎かしているつもりでも、つい気の好きから人に愛されるようになる。筒井自身が愛していたようなそれが男の上にあたらしく訪ずれているのではなからうか、筒井はいつもこの二つの問題のあいだを殆ど一年間往來ゆききして、いつも解決のつきようがなく深くはまつてゆくばかりであつた。

ことしの正月は桂うちぎしわをつけた筒井は、もう土地がかり官人の家の仕えの女であるよりも、娘子を見るような品の高いものであつた。彼女は一家の着るものから調度の類、諸儀式の器物、塗籠ぬりごめにある品々、とりわけ青年の身のまわりの物はすべて筒井が見ていて、筒井がいなければ一家の器物の一つを尋ねるに、全部の長持や箱、棚の中を捜さなければならなかつた。あこには何がはいつていて、此処ここには何がしまわれているかということまで、筒井は誦そらんじていた。土地のことで忙しい父と息子は、もう筒井がいなければ一日として送れないまでに、筒井はこの家にいなければならぬ女になつていた。それに食事のこと、筒井の指図がなければ何をつくり何を食うべきかも、外の仕えの女は知らなかつた。ほ

かの仕えの女は筒井の指図によつてはたらき、そしてそれがなければ外の仕えの女は指をうごかすことも出来ないほど、筒井を調法がり頼りにしていた。こういうあいだに筒井の愁いは少しずつ剥がれるときもあるにはあつたが、その全部を忘れるということは絶対になかつた。厨の夕暮、塗籠の二階、簀の子のたたずまい、庭の中というように、至る処に筒井は夫の呼吸を感じ、そのたびに少しきびしい声音になつて筒井は胸の中でいった。

「あなたさまは今何処にいられるのでございます。一日も早くおたより下さいませ。一日遅れば一日だけ恐ろしいことが近づいてまいるような気がいたします。人はなさけの深みにどうしても躓いてゆかねばならないように出来ていて、それを逸らすことができないようになつてゐるものでございます。それを逸らせるためにはあなたさまの御無事のお便りをいただくなければなりません。ただ、一枚の紙きれのお文でたくさんにございます。早く早く、一日も早く、なにとぞ、なにとぞお便りをしていただきとうぞんじます。わたくしどうしていいかさえ分らないくらい迷つています、ときにお便りだけが迷いをきつぱりとさましてくれるような気がいたします、早く早く、一刻も早く、こういつてゐるうちに早くお文をおつかわして下さいませ。そうでなかつたらわたくしはご親切なこの家の方々のお心から、もう離れることができなくなつてゐるのでございます。それはあなたさまと

いう方がわたくしにあるということを明らさまにしないためかも知じませんが、そうでなくとも、この家にはもはやわたくしという女がいなければ何一つするにも、出来ないようになっています。たとえ、あなたさまがお越しになっても、わたくしは人の情としてすぐこの家を立つてしまうことはできません、することをしてからでないと、とうてい見過しにはできないような家庭の事情でございますもの、どれだけ離れた考えをもっている、気の毒にもさびしい方々をそのままに置いて、わたくしだけがこの家を去るということはできません。」

「もう二年めの正月のきよう、御息子様の貞時様はわたくしをもとめられ、わたくしを求められることによつて一家のさびしさを救い、お父上の身のまわりの心づかいをしてくれるように仰せられましたがおお、わたくし、神仏に誓を立ててあと一年は人様に従くことのできない身分であることを申し上げて置きました。それは母が大病のときにおん命おとどめくださるようなれば、神仏へのおん礼のしるしとして三年のあいだ、殿方にまみゆることなきをおことわりしてあるのだと、お身様にまいる前のことを申して、貞時様のお心をしばしとどめているのでございます。貞時様の申されるようにはそのような心ざしを持たれるからには、なおのことわが願いをかなえてくれるよう、あと一年の春秋は決して遅い

とは思わぬと仰せられ、わたくしへの熱い心をじつと抑えておられるのは、見ていても悲しくおつらいことに思われます。あと一年くらいはすぐに経ち、お身様のお便りがなければそのまま何時までもお待ちする心でいても、世のさだめには勝つことができません。女はただの一日一刻のあいだにもその運命がどう変わるかも分りませぬし、変わるものもさだめのつねのようにおもわれます。お身様、みやこに上られてから四百何十日のあいだにお文おかきあそばすひと時もなかつたとは、よもやお身様も仰せられぬでございまいしように、絶えてお便りなきはお心のすみにあるわたくしのことも、やや忘れがちな日々、忘れるでもないようでそれほど深くは心にとどめていられぬ日々もあったように思われます。それはよく分つていながら四百何十日もお便りなきはあまりに悲しく待ち遠く、また、あまりに酷うございます。津の国の春秋に、人のなさけを制しながらじつとお待ちするわたくしは、どれだけの春秋をお待ちしていいかさえ分らなくなる時がございます。貞時様はいつまでも待つと仰せられ、そしてあなたさまはどこにお越しかも分らず、また、おん健やかにおすごしあるかも分らないこのごろ、女としてこういう時にどういう考えを持っていたらいいかも、しだいに分らなくなつてまいります。ことに津の国の田舎とちがい都にあらせられるあなたには、その毎日にも何彼と心の鬱さの紛れることもございまいしうが、青

い蘆荻ろてきのそよぎばかり見ていては心は毎日滅め入いつてしまふばかりでございます。」

「ただ一言ゆめにでもあらわれてお聞きしたいことが、筒井の胸にございます。筒井はただそれを知りたさにそのみを念じているのでございます。お驚きくださいますな、あなたさまは本統ほんとうにお健やかでおわすのでしょうか、それならそれ以上の倅しあわせはないとしても、ひよつとしたらお健やかでないのではないのでしょうか、も一つつき込んで申し上げることにお許しがあるならば、あなたさまはもはや在世あそばさないのでございますまいか、もはやもはやお健やかなお顔色もなく、おなつかしい声もなく、他界あそばしたのではないでしょうか、わたくしの心がかりはそれのみにございます。それはあまりに疎遠そえんな感じであつてのあなたさまらしくないほど、お便りもなくなっていることからわたくしにはもはやお逢いできないように思われてならないのでございます。渡舟のお別れでもそのような気がいたしておりました。あなたの渡舟が上手にのぼってゆくのをみつめながら、これは永いお別れになるかも知れぬと、そんな気がいたして悲しゅうございました。それなのに、その不倅ふこがみんな当つていまはあなたさまにこういう悲しい御在世であるかどうかさえ、疑わずにいられぬような物の終りをかんじるようになりしました。あなたさまはまさかそんなことはないと考えましても、それをお尋ねしない訳にまいらなくなったのでご

ございます。どうぞ、ゆめにでもお現れになりお健やかなお言葉を仰言おっしゃってくださいませ、それではなかったら筒井はどう考えていいかさえ、もう、分らなくなっているのをごさいます。ひと刻ときのゆめに、昼深いときのうつつにもお現れくださいませ、庭のさまよいにでも、厨くりやにはたらいにいるときにでもただそのひと言をお漏もらしくくださいませ、声あらば声をとどかせ、たましいに生きのあるものなら、うつつに、ゆめに、そらごとのおもいに、早く早く、ひと刻も早くおしらせくださいませ、ああ、あなたは本統ほんとうに生きていられるのをごさいますか、生きていられるなればなぜにお文おつかわしくくださらないのをごさいますか、わたくしのこの思い、この声、この嘆なげき悲しみがとどいてゆかないのでしょうか、声よ、いのちよ、嘆きよ、早くあの方のもとに飛び立って行きわたくしの悲しみを知らせてたまれ、あせりにあせてどうにもならない焦燥のすべてを知らせてたまれ、人の一心のとどかずば止まざるものを今こそ知らせてたまれ。」

筒井はひとり激しく胸のなかでくり返し、くり返し呼びつづけるような思いであったが、そういう思いの後は酷ひどい疲れがして、めまいのようなものが感じられてならなかった。その時、貞時は庭のなかの姿を見出すとふしぎそうに筒井の顔色を見直した。かつてない深い物思いが皮膚を澄ませ、物悲しい青みをふくませているからであった。貞時は手をあげ

てやや遠くにいる筒井を招き、筒井はうなずいて近よって行った。

「遠くからでもそう見えたが、どうも考えごとをしていられるな、考えても詮^{せん}ないことは考えなさらぬ方がいい。」

「はい。」

「過去のことならなおのことでござる。」

「では貞時さま、おたずね申し上げますが、人は生きているあいだはゆめに死を感じるようなことがございますものでしょうか。」

「生きている人も死ぬ人も、ゆめではどうあらわれても分るものではない。」

「さようでございましょうか。」

「ただ生きている人はきつといつかは現われて来る。死んだ人はいつまで経っても現われて来るものではない、何かそういう人でもあるのか。」

「はい、友の身のうえのことを考えていたのでございます。」

「生きているならきつと訪ねてやって来ます。」

「……………」

「その友もこちらに呼ばれるがいい、女ですか。」

「はい、女にございます。」

「そなたのような友を得てその人は倖せであらう。我らとてもそなたを友に得て毎日朝逢えるのが愉しくてならぬ。朝は夜中に待つほど遠い、遠いほど愉しい、天明とともに我友に逢えることは清い交わりではないか。」

「わたくしとても何気ない朝の麗わしさには、ここから嬉しくぞんじています。貞時さまのお咳のこえまで覚えましてございます。」

「毎朝そなたの生けかえる花を見て、その日の我らのよろこびとしている。父上のお部屋にも花を生けてくれるそうであるが、あらためてお礼を申す。母上、御在世のような安らかなお氣持でござろう。」

「お褒めにあずかるほどのことではございませんぬ。」

筒井は貞時と話しているときに何かはたらき甲斐のあるものを感じ、できるだけ毎日を愉しく美しく掃きよめたいと、仕えの女の遊ばぬように心をくだいて、それぞれ整えるものを整え、纏めるものをきちんと纏めていた。貞時はあまりに筒井が頭をつかいすぎはしないか、暇もなくはたらいでは手を傷めるようなことがないかと、それが氣懸りだった。

「筒井殿、少しお憩みあれ。」

貞時はなにかを憂えるように、そう筒井を劬^{いたわ}った。

「あとで憩^{やす}ませていただきます。ただ今は筒井怠^{いた}けていては皆さまの教えにはなりませぬ。」

まめめめしい彼女は手をやすめることがなかった。まだ若い貞時はときに可笑^{おか}しいくらい少年のような細かい気づかいで、筒井が川べりに出て仕えの女らを指図しながらいるのを見て、茫^{ぼうぼう}々たる津の国にすさむ木^{こがらし}枯^{いと}を厭^{いと}うていった。

「筒井殿、お顔が荒れはいたさぬか、かかる日に表の用足しはお止めになされい。」

「まあ、そのようなことを仰^{おお}せになるものではございませぬ。」

木枯にいたんだ筒井の顔は、桂^{うちぎ}の裏絹^{もみ}をひるがえすように美しくれないであつた。美しすぎるのに貞時の心づかいがあつたのだが、筒井は笑つてやはり止^やめなかつた。

「暖かい方でなされい。」

「はい。」

そばに寄つて来た貞時は、いかにも、世なれぬ無^{ぶしつけ}躰^{てい}さで筒井に求めた。

「手をお見せ。」

「はい。」

「そのように荒れているではないか、手はたいせつになさい。」

「まあ。」

筒井はあわてて羞かし^{はず}そうに、見詰められた手を引き込めた。引き込めたが、貞時は手の荒れだけを注意したにすぎないので、筒井自身は彼よりずっと心に何かさまざまな覚えのある女であることを知り、貞時の心のうるわしさをあらためて覚えた。

「では手はたいせつにつかうようにいたします。」

そういつて、彼女はなんとなく笑い、貞時もなんとなく答えるように笑った。ふと、筒井は「たいこの手は何人^{だれ}の手であろうか、何人が触^ふれてくる手であろうかと、心のずつと奥の方で彼女はこつそりと考えた。同じ思いは貞時にもあった。彼女の手の荒れや顔の荒れを怖^{おそ}れ、それを防ぐようにいう貞時はもはや筒井の手も顔も、そうしてその心も彼自身のもののように思われるからだった。その考えに間ちがいがあるうとは青年はかんがえなかった。

「筒井どの、いつかはお身の心まかせになるときがあるだろう、と思われぬか。」

「そのような考えをいいあらわすことは、わたくしとして控えなければならぬような気がいたします。」

「いや、そう言われるな、この家も、我らも、庭も、そなたのものになるときを我らは望んでいる。父上も、そして妹も。」

筒井はなにもいうことがなく、近づいてくるものをいまは静かに見まもっていなければならず、それがどう展ひらかれて来ても、筒井は胸をひろげてうけとるよりほかに、彼女のすることはなかった。人は運命を自分でひらいてゆくべきものだが、何と筒井自身はそこから多くの運命がひらかれ訪ずれて来ることであろう。

春が過ぎ夏がおとずれ、水郷の祭の宵よいであつた。社やしろ詣りの戻りの女おんな車ぐるまがつづいて、いずれが筒井の車だか分らなかつた。貞時はさがしうもなく幾つかの女車を遣やり過したなかに、薄うす葉ようを籠かごのようにふくらがし、元の方を扉ゆわに結ゆわえた女車があつた。薄葉の中にあまたの螢ほたるが入れてあるらしく、そこだけ、青い灯とも火しびのような光が胎はらんで、明りにかわるようにしてあつた。しかも、その扉のすきまからは匂におうような顔がさしのぞいていて、仄ほのかではあるが時々強い光を面おもてに受けていた。貞時は、女車のそばによると、失礼ではござるがお尋ね申すと断りながらいった。

「筒井殿ではござらぬか。」

「はい。」

そう答えた彼女は扉をすこし開け、開けたときに病ましげな悩ましい螢の光の明滅は、筒井の片頬をうかべ上げた。

「お分りでございましたか。」

「この通りの雑沓ざつとうでよく見分けがつかかねて困っていたところ、薄葉の螢でさては思
い申した。」

「往きの道すがらとらえた螢がこのように役に立たうとは思ひもかけぬことでした。斯様
いたしておけばお心づきかと存じていたのでございます。」

「よい思いつきであつた。そなたでなければ思ひいたらぬこと。」

「あまりの雑沓にて似も似た女車ばかりでございますもの、明りがそとからお見えになり
まして？」

「片扉がそつくり浮きあがるほど明るく存じる。」

「このいたいけな光の虫をごらんあそばしませ。」

「なるほど、虫でもこういう美しいのもいるものだ。」

薄葉をひらいて見ると、十数疋の螢は、月草つきくさの葉の上にとまり、静かに灯りをつぎつ

ぎ点^{とも}していた。しかも、今年の螢は例年にくらべて、ゆたかにも大きく育っているらしい。
 った。

「我ら螢に手をふれたことも十年振りでござる。童^{わらべ}の頃に宵々にはよく狩りに出たものだが、いつまでも童のようにしてはいられぬ。美事^{みじと}な螢だ。」

薄葉のすきをのがれた一疋は、いかにも羽根のある虫らしく高慢にも、しずかに立って行つた。飛びながらも明滅する光は、きれぎれに青い線を空に曳^ひいて上つた。それは、消えたり点^{とも}れたりするものの美しさであつた。

「今宵^{こよい}はもそつと螢狩りをいたそうではないか。」

「そなたは螢のいるところで車を駐^とめるよう。」

「わたくしとても絶えて螢狩りなどいたしたことがございませぬ。螢^{ほたる}頃^{ころ}になればこの

夏こそ思いをとどけようと考えましても、月日はいつも螢におくれがちにございます。」

「そなたは螢を好いてか。」

「螢ほど美しいものはなくなったらちねのころより心をよせております。」

「では存分に今宵は螢とあそびたわむれ申そう。」

「嬉^{うれ}しゅう存じます。」

幾すじもある小川のほとりで車は駐められ、夜露に冴えた螢火は眼も綾なるほど、草の上にあった。萩、桔梗、女郎花、りんどう、そういう夏と秋とに用意された草々には、まだ花は見られなかつたが、その気は充分にあつた。

「貞時様、これご覧ませ。」

薄の葉のうらにいる螢を上の方から見ると、葉の緑を溶いて光る美しさは眼も青くそまらばかりであつた。彼はこうして何のためか、何の音楽をかなでるつもりか、夏のひと夜を点れたり消えたりしているのだつた。哀れといえども哀れ、賑やかであるといえども賑やかだつた。

「こういう衣裳はお身によくうつるであらうの。」

「衣裳があまり美しくてはわたくしのようなものでは、おかしくてなりませぬ。」

螢は二つの薄葉の籠にほとんど一杯にとらえることができ、筒井のてのひらも螢くさくなるほどだつた。袖や履物も夜露にぬれ、筒井はちいさい嚏をしたほどだつた。彼らはやつと更けた星を見上げた。

「筒井殿、もう二年も半ば過ぎたが、お身は見違えるようになられたぞ。」

「どのような見違えられますか。」

「美しくなれたと申すのだ。」

「たわむ戯れはおお仰せられますな。」

「嘘ではない他の人びともそう申している。こういう童のような遊びをすることもそなたがいられるからで我らあらためてお礼を申す。」

「いいえ。」

彼らは車をあとにして土手のうえを歩いて行つたが、筒井は直覺的に何か恐れに似た嬉しさが^{きようきよう}恟々として襲うて来ることを感じた。それは貞時が永い二年のあいだ筒井からの返事を待つていることであつた。彼は彼と一緒に暮している安易さのためか、筒井から快い返事のあるまで、少しの乱れを見せずに彼は待つていた。

「筒井殿。」

「はい。」

「すぐ秋になり申す。そしてまた冬がおとずれて来ますの。」

「はい。」

「父上も早くそなたからお返事のあるのをお待ちのこと承知いたされるであろう。」

「はい。」

「間もなくでござるぞ。」

「はい、しばらくのご猶予をおねがい申します。」

「そなたは神仏に誓いを立てたと申されたな。」

「はい。」

「大祓おおはらいして解くことができるではないか。我らの倖しあわせは神仏もご嘉納かのうあらせられるであらうが……」

「いいえ、それは恐れ多くて筒井にはいたしかねます。」

「ではいつまでも待つことにするぞ。」

「はい。」

女車は垂扉たれどをあげ、筒井は腰をおろしてから心は一杯であつた。あれから二年まるで便りがない男にどうつなぎを結ぶ自分であらう、生死もわからぬ人をあくまで待ち抜くのが女の道であらうか、ともあれ、三年は静かにからだをまもらねばならず、それをそうしないということは筒井の心が済まされなかつた。そして不思議に二年の半ばをすぎたいまは、男の呼吸いきづかいがしだいに筒井の身のまわりから、濡みがしずまるように遠退とわのきつた。そしてこれは詮せんないことだつた。男の何かに確しつ乎かりとつかまっていようとする筒井

には、妙に貞時の感覚とか印象とか親切さが日を趁うて加わり、解きがたいものになっていた。貞時の父は筒井を呼び改めて家族の一人として迎えたいといい、もう、精神的にも、情の深さからも、不倖な一家の事情からも、筒井は言い逃れはできないようになっていた。その心苦しいなかには、何か明るい望が前の方にあることも、まだ若い筒井の眼に見えずにいらなかった。人はこういう中に倖せを求むべきであろうか、人は倖せになるために生きるものであろうか、人は決して倖せを避けて通る者ではない、花を見ないで道を通ることはできない。

「筒井殿、夥しい螢を見られい。」

前の車のなかから貞時がこう呼ばわり、筒井は垂扉をあげてあおぎ見た川べりの草の上に、一面に光る螢がちりばめた銀の縫いのようにひらめいていた。ここは大川にそそぐ幅広い流れの裾だった。車は馳り景は細かく移るごとに、変った岸べの螢が先刻見た光とはべつなあたらしい光を点じ、そしてその幾つかは舞い上っていた。

「まあ、美ごとな螢にございます。」

「我ら螢の中を馳ってゆくようなものにござるぞ。」

前の車のなかの声は弾むような元気さで、声一杯に叫んだ。

「螢はあなたさまによう見られたさに舞い上っております。あなたさまを螢は好いでいるでございますよう。」

あとの女車の中の声が穏やかにそう答えた。そして前の車の中のこえは一層大きく、一層氣負った調子でいった。

「そなたも螢にどこか似た方のように思われるぞ。」

「どこが似合いました？」

「美しさが青い光のように見え申す、頬のいろも似ている。」

先の車の声は笑いふくんで呼ばわり、あとの女車の声もおなじ笑いをもらした声音こえだった。

「さよう仰おほせられても筒井はなびきませぬぞ、お心はどうにいたいてはいますけれど。」

「心をもらつて外のものをもらわないということはない、貞時、一生かかってこそなたを逸そらすことは毛毫もうごうござらぬ。筒井どの、覚悟をされい。」

前の車の中の声は愉たのしげに歌うように叫んだ。

「覚悟はどうにいたしております。」

あとの車の声はやや低く、しみじみと答えた。

「たしかに覚悟はいたされてか。」

「たしかに。」

二人の声はふつとりと切れた。静かに車は土手の草の上をさっさと踏み分け、一層、静かなあたりに息づかいを洩らし^もていた。そして一旦^{いったん}切れた声音はふしぎに秘密をまもるように、再び続けられることがなく、野の道を馳^かって行^いった。飛び交^かう螢の数がすくなくなり、川は道からしだいに遠のいて行くほどに、町がちかづいて見えた。

「筒井どの、なにか話されい。」

「みんな申し上げました。筒井、なにも、お話申すこととともなくなりましてございます。」

また一^{ひとしき}頻^{とき}り黙^{もく}った刻^{とき}がつづいたが、町にはいるには惜しいくらいの愉しさを、きゆうに言葉でそれを表わさなければならぬものが感じられた。おなじ思^{おも}いは筒井の心にもあつた。ふたたび来^きないような愉しさをここで別れるには惜しかった。

「此^{こよひ}宵^{みやまい}の宮詣^{みやまい}りは一生を通じて詣^よつて来^きたようなものだ。お身と我らの倅^こせをことほぐためにも宜^{よろ}かった。」

「筒井も心はればれしく斯^{かよう}様な嬉しいことは今までに覚えませぬ。それにあの美しい螢は

よいおくりものでございました。」

「我ら螢を忘れてはならぬ。そなたの爪もいまに螢のように美しくともれることであろう。」

貞時はそういつて筒井の爪が、どうかして光に勾配こうばいを見るときに螢のような光を見せることに、思い至った。それだけを見とどけただけでも、この宵は愉しい一つの物語のようひろがつて振りかえられた。

三年めの正月が近づき、香料を袋に入れた薬玉くすだまが五色の糸で飾られ、柱から美しい造花にまもられて垂れた。元旦うたげの宴には屠蘇とそ、干鮑貝くしがい、干海鼠ほしなまこ、丸餅まるもちの味噌汁などが、それぞれに用意され、祝日に忙しい歳暮が筒井の眼の前にあつた。ことに今年の元旦はいつもより賑やかにぎにも豊かな酒肴しゅこうが、筒井のためにも心配られた。それは筒井が約した三年めの春が訪ずれ、筒井は神仏ちんぶつの誓ちかひをとく日だったからだつた。筒井は師走しわすの日をせめてもの心だよりとして男の便りを待ったが、例に依つてそれは虚むなしい彼女の心だのみに過ぎず、あと二日寝れば正月というのに、何のたよりもなかった。まる三年のあいだ心を砕いて待つていた気苦労も、何の足しにもならなかった。しかも、貞時一家はこの春に筒井を

迎えるために万端の華々しい用意に怠りないのを見ると、筒井は三年も便りがないとはいへかつて夫を持つていた身分を隠して貞時に従くことの心苦しきよりも、そんな明白な嘘はつけるものではなかった。といってそれを貞時にすなおに話すには、あまりに貞時の絶望を大きくするものだった。そんな話をきかしても貞時は許してくれるであろうが、筒井は人の心を酷たらしく悲しがらせることは、いままでに仕えた筒井として出来ないことだった。筒井はきよう一日、あともう一日というふうに詰ってゆく年の瀬に一片の便りを待つ気持でいたが、生死も定かならぬ人の便りなぞあるはずがなかった。もう凡てが終りだった。人の情けを偽ることのできない彼女は、元旦の前の日、朝早く裏戸からひそかに貞時の家を出て行つた。それより外に道をえらぶべくもない彼女は、まだみんなが寝んでいるあいだ、正月の飾りにまもられた恩愛の家の闕に別れた。

裏戸口にもう白みを見せている梅の木の下で、寒そうに肩をすぼめた筒井は心の中でそつと呟いて、親切な貞時親子、同輩にわかれた。

「皆さまのお心づくしは筒井、生涯お忘れはいたしませぬ。それをそのままお受けするほど筒井の心はくさつてはおりませぬ、なにとぞ、筒井がまいりませぬ以前のように静かにおくらし下さいませ。恩愛にそむく罪はあるいは後の日のわたくしのさだめを暗くするか

も存じませんが、その折には、よろこんで恩知らずのつみを負う考えにございます。なに
とぞ、よき初春をお迎えくださいますよう、皆さまによりき倅しあわせがおとずれますよう。」
筒井はかくてこの家を去つた。

そしてかねて彼女が知り合つた二里はなれた宮腹みやはらという村のおさの家に、彼女は突然
あらわれて、仕えの女として忙しい大晦日おおみそかをはたらくことになった。宮腹にも主人の妻
はみまかり、その娘一人は唾で物がいえず、弟は年若であつたが父をたすけて家事にいそ
しんでいた。ここにも家族の不倅と冷たさは筒井の心を悲しがらせ、彼女はさびしく笑い、
多く働いてそれを紛まぎらせながら、作るものは温かく品高い蒸物むしものなどに皆を喜ばした。家
の中は正月半ばになると見ちがえるほど清く美しくなつて行つた。筒井自身はときどき箒ほうき
を持つたまま襖ふすまに對むかつて、じつと、或る考えごとにとらわれ、はつとして仕事にかかるこ
とがたびたびだつた。水郷すいこうの貞時の家、そしてきらびやかな正月の宴うたげも、筒井が去つて
は催物もよおしものの数々が控えられたことであらう、しんせつな父君、額の若い貞時に永い三年
を待たせたことなど、自分は何という大きなうそをついていたことであらう、筒井は終日、
鬱々うつうつとしてそれらの愉たのしかつた水郷の家のことが、心におおいかかつて来てならなかつ
た。

哀れな唾の娘は筒井を慕い、筒井は彼女をできるだけ明るくみちびいて行つた。唾の娘の言葉は筒井にははじめのほどは分らなかつたが、しだいにその表情で解わかるようになった。彼女はただ終日、あああ……というだけだつた。その言葉をよみ分けるために筒井は小鳥の餌えをすつてあたえてから、この唾の娘の頬になみだのあとがのこつた。彼女のほしいものも分り、弟を呼ぶときの調子が解れば弟を呼ぶのであつた。弟は美しい水々しい紅こうきよ頬の少年だつた。彼は筒井を好いて、筒井のあとばかりを趁おうて慕つた。父という人は筒井を娘のように愛し、おなじ物をあたえ、おなじ食べもので劬いたり時々ふしぎそうに筒井にたずねた。

「あなたのような人がわれらの家ではたらいで下さるということとは、まるでゆめを見ているようなものじゃ、あなたは何処どこから見えられたのか。」

「少し事情がありますので御厄介ごやつかいになつたのでございます。おたずね下さらなければ嬉うれしゅうございます。」

筒井は淑しとやかにこれ以上たずねてくれるなという、柔らかな印象をあたえた。父という人は自らの無ぶ駄つを詫わびるように、やさしくいつた。

「お訊ききしてわるければ申しますまい、どうか我が家に永くとどまつて不倅な姉弟をすく

ってやって下さい、まるであなたは誰か貴い人からつかわされたような方じゃ、あなたのお顔をはじめて見たときからこの人を永い間待っていたのだ、そしてやっと姉弟を救ってくれる人にめぐり会ったのだと思つたほどでござる。」

筒井は黙つて悲しく父として老いた人が額ぬかずいて語るようなその言葉を聞いていた。永い間彼女は父を思うひまがなかったが、いま急に彼女はやさしかった父の顔を眼の前に見るような気がした。御年もおなじくらいではなかったらうか。

「わたくしは父母とも失いまして身寄らないものでございますから、永くおつかい下さいませ。」

「それは悲しいお話、われら父ともなつておつきあい申したい。」

「ありがとうございます。」

「おいくつになられる。」

「二十三にございます。」

「御婚儀は？」

「はい。」

筒井はうつむいてそれには明らさまな返事ができず、黙つたままにいるより外はなかつ

た。

「いや、これは失礼なおたずねを致した。気にかけられるな。」

「いいえ、ただ悲しいことを避けながらいつもそれに趁おわれている女にございます。」

「いや、かならずお身のような方には、いまに倖しあせが、おとずれるでござろう。」

衣を縫うていれば傍かたえに来て、姉弟が坐り、立つて庭に行けば弟は庭の木々の名をもの語り、秋に実るものがあればその美しい果実の色までを話した。そしてそういう秋までには梅、一位、杏、桃が間もない春には、いかに美しく暖かに咲き出るかということ少年は解いた。彼自身も好きらしい木々へのこまかい観察がふくまれていて、こういう少年こそ和歌の michi をとけば、和歌をものするようになるであろうと筒井は姉弟にひまあれば和歌の michi をといて聞かせた。果して少年は和歌をつくることを覚え、才もおのずから豊かな冴さえを見せていた。物の見方のこまかいことが筒井にはたのもししい将来を見せていた。

間もなくめぐり来た春は宮腹の家や庭をあかるくし、花は一どきに勢いを得て開いたが、筒井にあるはずの便りは依然なかった。筒井は男を怨うらむとか薄情者であるとかいう観念を持たず、ただ健やかであれと思うほかは淡い気持であつた。こうも心からうすれてゆくも

のかと思うほど、遠い人だった。きゆうにその顔を念じて浮べようとするほど、もう顔の感じがまとまって思い出せなかった。筒井は、こういう自分の心持を男に引きくらべ、男の頭にも自分の顔かたちがこんなふうには薄れて行っているのであらうと、やはり水のような気持でしか考えられなかった。

或る悩ましく花の蒸れるような夕方、姉弟が来て筒井に告げた。それはこの一と週りのあいだ、毎日のように邸をうかがう男がいるとのことだった。筒井はそれを一度も眼にしたことはなかったが、その言葉にはあらたまつた驚きで、とうとう彼の方が見えたのだ、あの方はあの日から自分を尋ね歩いてとうとう此処までお見えになったのだ、あの方でなければできない尋ね方なのだ、あの方が見えたのだ、わたくしを尋ね、かつて捨てられたわたくしを拾いに見えたのだ。だが、わたくしはお逢いしたいのだらうか、お逢いするほどわたくしは厚顔しい女であらうか。わたくしはもうお逢いしたい、お逢いすることによつて凡てを委ね凡てを忘れたいのだ。

「きょうもお見えになつておられます。」

弟は狩衣をつけた若い人だといった。もしやと思つたが気色にはあらわさなかった。「何かお訊きになりませんでしたか。」

「物問いたげだったから引き返してしまったの。」

筒井はもう猶予できずに姉弟に家にはいるようにいい、とり急いで塗籠くちらの階上にのぼって行つた。その重い埃ほこりの深い扉を開けると、門前みはる一帯が見廻みはるかされた。門の扉のうしろに立つた狩衣に烏帽子えぼし姿は、違たがわぬ貞時だった。

「あの方に違いなかった。もう誰にも遠慮なくお逢いしよう、進んでお逢いしなければならぬ。わたくしを搜さぐり出された方だ。隠れて外にも出なかったわたくしを、神仏のちからさえ及ばぬこの家から尋ね出されたのだ。貞時さま、こちらにお向きあそばすよう。」

筒井は扉にしっかりと掴つかまり少時うごかなかった。貞時はそれを知らず、筒井は急いで塗籠くちらから下りて行つた。そしてその時筒井は静かにしていられぬほど、誰かが吩咐いいつけるように、逢えよ、逢うのはお前の礼儀でもあり、そしてかつて無断でその家を出た詫わびでもあるのだ。逢えよ、逢えよ、逢いたがっているのは貞時と同じ気持ではないかと、ふしぎなちからを抑えることができなかった。

筒井はしずかに片扉をひらいて、貞時の前に深く頭を垂れた。

「ああ、筒井殿、やはり此処ここにいられたのか。」

「はい、あれからずっと御厄介ごやっかいになっています。」

「でも、よく逢つてくださった。」

「ただ恐れ入るばかりでございます。前からお通いのこともやつときよう承り御無礼ばかりいたしました。あれほどたいせつにしていたのに恩愛を知らぬ女にございます。」

「それには我ら永い間考え侘びていたところ、見かけるところ以前よりも美しくなられた。」

「こちらでも、よくしていただき喜んでおります。」

「よい人の住む家に適しているところのようだね。」

貞時は風致よろしき庭をひとまわり眺めやった。凡てが主人の好みが出ていて、その好みは築庭の奥をきわめているようであつた。だが、表で話することはできず、彼女は公に主人に話をするあいだ庭の片すみの暇を乞うたのであつた。

「どうぞお奥までおはいり下さいませ。」

筒井はわるびれもしなければ前に見たとおりの親しい言葉つきであつた。意外のあつかいに駭いた貞時はかえつて躊躇い、顔をそめながらいった。

「我ら他人の庭にはいつてはどうかと思うが。」

「いえ、お許しを得てまいつたのでございます。」

筒井は息もつかずに詫^わびた。「その折、あまりのおなさけ深く身に余りまして無断で立ち去りましておわびの致しようもございませぬ。」と筒井は面^{おもて}をぬらして沁^{しみ}々いった。これらの言葉はいつかはいわねばならぬときがあると考えていたが、その日はとうとう遣^やつて来たのであつた。

貞時はほかには何もいわず、ただ、ひとつの言葉だけを勁^{つよ}く、迷うことなく答えるようにといった。

「我が家におかえり下さらぬか。我が家はそなたの家も同様なのだ。もう情実^{なさけ}は負わなくともいい、潔^{いさぎよ}くお越しあれ。」

「ありがとうございます。」

「すぐに支度してまいられい、父上のお喜びはいかばかりであろう。」

「何とお詫^せび申し上げていいか、筒井、恐ろしゅうございます。」

貞時は急^せきこんでこの家の主人によく事情を話して、すぐに只^{ただいま}今から同伴するようにいった。然らずばなかなかこの家にもそなたを調^{ちようほう}宝^{たうほう}がつて離すまいといった。

「わたくしは只今からでも参りたいのでございますが、今まで御厄介になつていて諸々のしごとの後片付をしないで出ましては氣持が悪うございます。」

筒井はこの家の主人にもつれあい亡くなっていること、娘はあわれな唾のこと、弟と三人暮しのこと、そして筒井が家事一切を承つてそれを整理していること、一家から厚くもてなされていることを話して、筒井は十日間の猶予を乞うた。

「それまでに主人にあなたさまのこともお話すの考えでございます。そうでなかつたらお暇はなかなか戴かれないかも知れません。」

「きつと十日の後に我ら迎えに上り申すぞ、よもや、こんどは隠れなぞなさらぬであろうな。」

「かならず参ります。それについてお話して置きたいことがございます。これの御承引ごしょういんがなければ筒井はまいれないかも知れませぬ。」

筒井の顔はあらたまつた悲しいゆがみを見せたほど、重い心苦しい問題であるらしくかつた。その問題をとかねばならぬ決心はかえつて筒井を異様な青みのある美しさをたたえさせたくらいだった。

「では、それを話されい。」

貞時もなにやらとうに決心しているふうだった。

「わたくしは夫を持つたことのある女にございます。お隠しして申しわけがございません

が。」

「それはなんとなく存じていた。そして只^{ただいま}今はどうなのか。」

貞時はすこしも驚かなかつた。むしろそれを聞いた方が心がやすまるふうであつた。筒井は夫が消息を絶つてから永い間便りのないことを話し、その便りだけをめあてに生きていたのだといい、貞時の家を出たのもそのためだつた。

「それで何年くらい便りが絶えていられるのか。」

「三年と四月にございます。」

「三年と四月。」

貞時の顔にはなにか怒りのようなものが鋭くあらわれて消えた。三年のあいだ消息を絶つては人はもはやあたらしく婚家のうたげに列^{つら}なつてもいいことに平安朝のしきたりはなつていた。

「そのあいだただの一度も便りがなかつたのか。」

「はい、永い春秋はただわたくしには永い永いものでございました。しかしわたくしはそれを待ちぬいていたのでございます。」

筒井は三年が四年になるか四年が五年になつていくように遙かな昔におもえた。そして

その頃と何か世界が變つていて筒井自身も變つてるように思われた。

「そなたはその御仁ごじんが生きていられるとお思いか。」

「生きていられるように思われます。生きていられるから消息がないのだと考えられます。」

「訪ねて見えると思わるるか。」

貞時のこの尋ね方には、行きづまりがあり、筒井にそれをひらいてもらいたい氣持がかくされていた。

「きつと一度だけは何時いつの日かに見えるような氣がいたします。」

「その時は何と仰せおおられるか。」

「その折はその折にございます。お逢いできなければそのまま彼あの方をおかえし申します。」

「それを聞いて我ら安堵あんどのおもいがした。それにしてもそなたは永い間怱こらえていられた。

その永い間怱えていられたことだけでも、その人はそなたの倅しあわせを願われるであろう、貞時、そなたのような女の人ははじめて知り申した。」

その時、宮腹の主人は遠慮深げではあったが、二人の前にあらわれ、筒井は極めて落着

いたこなしで貞時を紹介し、そしてあらためていった。

「迎えにまいられたのでございます。いままで何ごとも申上げずお許しくださいますよう。」

「なるほど。」

宮腹の主人は貞時を見て、はじめて筒井が秘めていた事情を諒解したのであった。貞時の風貌は宮腹の主人の反感を呼ぶような種類のものではなく、きわめて善良な好印象をあたえた。

「お庭先にて無礼の段、おゆるしあるよう。」

「せめて簀の子まで近寄られい、お父上とは御昵懇なものでござる。」

「それははじめて承ります。」

貞時は自分の父を知る主人を見直して、あたたかさを感じた。

「近年おあい申さぬが、お父上も、わしもみなつれあいを亡くし、かなしいともがらでござる。」

筒井もこと偶然ではあったが、父同士の知り合いには、くすしき縁を感じざるをえなかった。彼らは簀の子にあつまり、梅花の匂いをこもらせた白湯を味った。貞時はなんと

くいった。

「いずれ申し上げる折もござろうが、実は筒井どのとは父も許してくだされた仲であつたが、筒井どのの謙遜けんそんから身をひかれたわけにて、なにとぞ、おいとまたまわるよう願わしく存じます。」

「さような訳なら何でおとどめ申そう、いや、筒井どのが見えられてから我が一家は蘇生そせいの思いが致しております。」

筒井は頭を垂れ、どこに行つても大切にされる自分にどこがそれほどの人格ひとがらがあるのか分らなかつた。そして自分が去ればあとに残つた人の心をさびしくする、……そういうことにも徳のない自分を感じた。徳のある自分になろうとすれば、生活を投げ出さなければならなかつた。

「すぐに筒井どののは行かれるか。」

「いいえ、愉たのしき十日間ほど御娘子様、弟様にたてまつり、家の中をととのえ、お許しの出る日を待ちとうございます。」

「ああ、よく申された、愉たのしき十日あまりとはよく申された。」

宮腹の主人は筒井の手をとらんばかりに、その言葉を喜んで受けとり、いますぐ行かれ

てはこまるともいった。

「貞時さまにまいっても時々はお家のこともおてつだい申し上げたく思います、貞時さま、この儀いまからおねがしいたしておきたく存じます。」

「それでこそまことの女の道、貞時よろこんで承認します。」

そのとき宮腹の主人は愉しく笑いをふくんで、自分の愛児にあたえる言葉のようにいった。

「お二人の宴うたげにはわしもお祝いにあがってもいいかの。」

「枉まげてお招きを受うけとりくださるように只ただいま今からおねがいたします。」

「ありがとう、われらの娘もともに宴につらなるでござろう。」

間もなく十日を約して貞時はいそいそとして門前に出て行き、筒井と宮腹親子が見送るのであった。

「きようはよい吉日であった。」

あとで宮腹の主人はいった。

「よくその日まで気をつけてくださるよう。」

主人はあまり仕事に熱心になりつかれてはならぬと言ひ添え、筒井は頭をさげて善い人

ばかりいる世界を感じた。どこに行つても、筒井は悪い人を見ることがなかった。四年近くも便りのない人にも、筒井はそれを責めるには余りにも心は平明であり、しあわせであつた。その夜、彼女は黄金のみ仏を抱いてそれにのみ心をささげ、おん慈しみを乞うのであつた。み仏は筒井の肌にあたたためられ、殆ど、冷たくなつてゐる日としてはなかつた。

「み仏よ、あなたさまをおまもりする日はもはや生涯をこめてのことでございます。あなたさまより外には、もはやお待ちいたしませぬ。みやこに去られた方も、あなたさまのなかに秘められてあるという、愚鈍なわたくしの考えをお憐れみくださいませ。あなたさまより外には筒井のまもるべき方もございませぬ、そしてあたらしい彼の方も加えて永くおまもりくださいませ。なにとぞ、人間のさだめない宿命の汚れをおいとい下さいませぬう。」

夜はあたたかいほど外は晴れてゐるらしく、水辺を去るみず鳥のこえが絶え間なく北方につづいて起つてゐた。それは春が来る前のしらせのようなものであつた。筒井はふと眼をすえてもう便りの絶えた男に、何かいわなければならぬものをも感じた。

「もうお便りがなくなつてから四年にもなります。そして筒井はお便りをいただこうにも、いただきようがなくなりかけています。筒井もまだ生きねばならず、どうぞ筒井を生かし

てくださいませ、四年というものあなたさまをお待ちするために生きましたけれど、それは反古^{ほご}同様ないのちのつながりでございました。あとの何年かはわたくし自身のために生きてゆかなければなりません、そしてわたくしによって更に生きてゆこうとする老いた人と、その御子息さまとに望^{のぞみ}を絶えさせることはわたくしには出来かねます、ちからを藉^かしてもろともに生きてゆかねばならないのでございます。これもお許しくださいませ、そして何^ど処^こにいらせられてももはやわたくしのことはお忘れあるよう、お尋ねくださらないように念じ上げとうぞんじます。わたくしはあなたさまを忘れるために努め、あなたさまなきように心に心できめようとするほど、まだあなたさまに悩まされていて悲しゆうございます。ともあれ、いまは何よりも永いお別れをいたしとうぞんじます、それだけがわたくしのこらえ^{こら}えて来たあとに、やっと分^つつたことのそのひとつでございます。」

「わたくしどもがはじめ別れて勤^{つと}めおうたのが、みんな間違^{まちが}うて行^いったはじまりのよう
思われます。人はもろともに暮^くらしていたはずのものが別れてはたらき、別れて行き逢^あうとい
うことがもう悲しみのはじめに思われます。大人のような考えをおたがい^{たがひ}に持ち合^あつて
いたようなのも、ここまで来て見ればあれはみな子供のそら考え^{かんが}えとしか思われません、子
供の考え^{かんが}えごとがわたくしどもをたいへんに不幸にさせ、もし仮に他^{ほか}の人であつたら現^{いま}今の

わたくしのような善い人たちにかこまれることもなく、かなしい憂目うれめを見たかも分りません。ともあれ、わたくしは仕合せでございます。仕合せのままお別れすることはきょうの何よりの喜びにございます。わたくしにさえ仕合せがあるくらいでございますから、あなたさまにもその仕合せの翼が間もなくあなたをかき抱いてくれることは疑いませぬ。かならずあなたさまも愁うれいの眉をおひらきになるときがあると思います。」

「さよならきのうのひとよ、かつてわたくしの中にあった大きい信仰のような人よ、わたくしは今宵こよいこそしめやかにおわかれの言葉をさしあげる時を得ました。あなたさまのみ仏は、筒井は永くおもりをいたしたい考えにございます。何よりも世界でもっとも大切なものにおまもりいたします。では、つつがなくおすごし下さいませ、わたくしごときを決しておもい出してくださいさらないように終りにおねがいたします。あなたさまは大変によい方であらせられました、いまもなおいい方であり善いお心を持っていられる方であることを疑うものではございませぬ、どうぞ、またなき幸いのうちにお暮しく下さいませ。」

筒井はこういう禱いのりのような言葉を頭にうかべているあいだに、男はずつと遠のいてゆき殆どその顔も見えないところにいるように感じ出した。そしてやっと筒井はやすらかさを胸におぼえた。

十日あまりの日はまたたく間に過ぎた。そしていま一日、もう一日と停められてゐるあいだに、筒井は気が気でないようなあせった気持ちになった。哀れな唾の娘は終日彼女のそばを離れず、弟も同様はなれなかった。唾の娘はさまざまな海の貝、衣裳の断ちぎれ、造花を筒井におくり、宮腹の主人は紅梅色の襲かさねを生きがたみとして贈り、亡妻のこまごまとした女物を筒井にあたえた。別れを惜しむための家だけの宴がもよおされ、春の菜のあつものにさびしい一夜を送った。

そのあいだに貞時は二度尋ねて来たが、この不倖な家からすぐにも筒井を引き出すことが出来なかった。彼自身の幸福のために、あまりにも人を悲しがらせたくはなく、むしろ快くあと二日くらいはとどまることを彼自身から申し出たほどであった。二度目のときはすでに十日を過ぎていて、貞時自身も一刻も早く筒井のそばにいたかった。彼は主人が座を立つたあとで、せき込んだ悲しい掠かすれた声音こえになつていった。

「我ら何事も手につかぬほど待ち申しているほどに、一日もはやく来て下され。」

「わたくしももう参りたくはぞんじていますけれど、いま一日お待ちくださいませ。」

貞時が去つた後二日、やつと筒井は宮腹の家に別れを告げた。この家にとどまっていた

ことも偶然ではあったが、この偶然はなはだ筒井にとって明るい春秋がおくられ、そして此処ここにいたために貞時に逢えたようなものであった。

宮腹親子は門前に出て迎えの女車に乗った筒井に、こういう善い人たちが生きている世の安らかさを再び感じたほど、ふしぎに感動したのであった。

「かならず吉日にはたずねて見えられい、我らその日をお待ちする。」

主人がそういえば唾の娘は、ただ、声をあげて別れを惜しんだ。

「ではお別れいたします。」

筒井は人情というものの重たさを背負いきれない気持であった。女はみなそんなものかも知れないが、筒井の生涯の半ばもその続きだった。彼女は愛せらるるために身も心も重く、そしてそれに離れるために苦しまねばならなかった。それにしても筒井の知った人びとは、どの人もみな不幸と悲哀を言い合わしたように持っていた。或る意味でどの人にも多少の不幸がくい込んで離れないのかも知れない、筒井のくるしみなどは物の数であろうかと思つたが、彼女はその三年四ヶ月の永い歲月は一生の半ばをついやしたように永いものと思われた。

暖かい春の昼頃であつた。筒井がもどつて来てから急に明るくなつた水辺の家では、いよいよ筒井と貞時の婚宴の日が迫ると、家の中、庭の内そとがあらためられ、塵ちり一つのこさずに掃き清められた。貞時は筒井の長い髪を見ていつた。

「とうとう今宵こよいという日が来たね。永い間ではあつたがきよふになつて見るとそれほど永いとは思わない。」

筒井はだまつて領うなずいて見せた。この四年のあいだに女としてまもるものを守つた彼女は、なにか苦行を終えた後のような身の軽さが感じられた。いまになつて見ると何の為に永い間はたらいてばかりいたか、徒事あだごとにすぎないことに思われた。人は徒らいたずに無駄な歳月を経へてから、或る頂いたきたてに辿りつくものらしく、そうなると役えきなき歳月もまた頂に達する日のために、用意された苦行としか思われなかつた。

「永いゆめでございました。なにも彼かも、あまりに遠い日のことに思われてなりませぬ。」
「そなたは誰でもできないことをなされた。そのよい償つぐないは我らがつかまつるようになるであらう、まるできよふの日のためにそなたは苦勞されたようなものだ。」

「それは勿もつた体のうございます。わたくしはやはりあれだけのことをしていなければならぬように、約束されていたのでございます。それゆえにきよふの身心の軽さは生れかわつ

たように思われます。」

「間もなく日がくると変った夜がおとずれて来る……」

筒井は赧^{あか}くなつてうつ向いた。梅の梢^{こすえ}にきようの夕陽はひとしきり華やいで間もなく、日ぐれがいきなりやつて来て暗くなるのであらう、西、東の対^{たい}にはや灯火^{ともしび}がともれはじめた。

「では今宵にさいわいあれ。」

貞時が去り、筒井はくらみかけた庭先を去ることをせず、まだ明るみを持つ雲の色を見つめていた。変ることに迅^{はや}く、形を消すに早い夕雲は間もなく鼠^{ねずみ}色のひと色にとざされてしまった。だが、まだ筒井は氣のせいか庭戸から離れようとしなかった。その時、築^つ地の外に落葉をふみ分ける音らしいものがしたが、筒井は氣にしなかった。しかし音はなおつづいてそれが人の跽^{あしおと}音であることを知った。こういう日暮^{たれびと}に誰^{たれ}人の跽音であろうと、筒井ははじめて注意を向けた。跽音は裏戸のあたりで停^{とま}つたらしく、何となくその方に眼をとどめた。その折、低い声音^{こえ}を忍んで二声ばかり聞え、その声は実に遠い記憶^{こた}に応^{こた}えのある声だった。

「筒井、筒井、」

筒井は愕然^{がくぜん}として髪の毛を釣^つられるような緊迫した一瞬の中にあつた。名前はふたたび呼ばれた。その時、ふたたび駭^{おどろ}きに憑^つかれた筒井はその声のぬしが、四年前に別れた男であることをもはやうたがうことが出来なかつた。とうとう戻つて見えられた。しかも今宵という日に、漂^{ひよう}然^{ぜん}ともどつて見えられた。しかも生きていられ健やかであつた。これは一体どうしたことであろう——筒井は、からだを小さくできるだけ小さくし、呼吸^{いき}を呑^のみこんでなおうかがうように裏戸の方を見すえていた。

「筒井、ただいま戻つて来た、お会い申したい。」

男の声はむかしとは渝^{かわ}りのないものであつたが、筒井はすぐに答えることの軽卒さを身に感じた。それにしても今宵とは誰のいたずらであろう。筒井は悲しい怒りさえかんじ、眼をうら戸から離さなかつた。そして彼女は晝^た紙^{とうがみ}にさらさらと書きくだして、それを自分で持つて行くべきか、仕えの女に持たせようかと考えているあいだにも、その声はつづいた。

「この戸を開けたまえ。」

ついに筒井は裏戸の方に行こうとしたが、きゆうに会うべきでないことを知った。彼女は仕えの女を呼んだ。仕えの女に彼女は裏戸にいる男を教えた。

「これをあの方^{あなた}にたてまつるよう、ほかのことは承^{うけたま}つてはなりませぬ。ただこれだけを差し上げるように。」

筒井は畳紙^{たたし}にしるした一首の和歌を仕えの女に手渡した。

「はい。」

仕えの女は裏戸^{うらど}に向いて去った。

あらたまの年の三年を待ちわびて

ただ今宵こそにひまくらすれ

仕えの女はしばらく裏戸^{うらど}から去らずに、何かを待っているふうだった。筒井は固い唾^{つば}を呑み身じろぎもせず^{おお}に立っていた。仕えの女はもどつて来ていった。

「これをと仰^{おほ}せられました。」

筒井は早書きにした紙片にしるされた文字をなつかしく読みくだった。落着いた心をそのまま述べたような和歌だった。そしてそれは男が謙遜^{けんそん}にもできるだけ広い愛を持ち、その愛情を示すことにより、一層、筒井を愛したような迫ったものさえうかがわれた。

あづさ弓ま弓つき弓としを経て

わがせしがごとうるはしみせよ

「わがせしがごとうるはしみせよ」こういうお気持ちでいられたのか、自分にしたように貞時さまに尽すようにとのお言葉であつた。これはありがたい言葉であつた。

「あづさ弓ま弓つき弓……」こうも弓にも品々あるほど、我も苦勞したといわれている、便りのなかつたのは苦勞が多く、身を起すひまさえなかつたのではなからうか、それゆゑにこそ逢いに津の国に下らなかつたにちがいない、それは筒井はまるで知らなかつたことだ。やはり彼方あのかたはよい人であつた。いまになつてもよい心を失なくさずにいられるではないか。筒井は頬をぬらしながらなお一首をものし、何度もよみ返して、さて、さめざめといった。

「これをお渡しあるよう、筒井はいいあらわせないお礼を申しているとおつたいくだされ。」

あづさ弓ひけどひかねど昔より

こころは君によりにしものを

そしてなお、しばらくじつとしている間に仕えの女はもどり、よろしく仕合せにつくよう仰せられ、こちら向きになり拝して去られましたといった。筒井はたえかねて自ら裏戸に走り出て見たが、夕はもはや夜を継いで道のべ裏戸近くに人かげはなく、暖かい夜の夕靄さえそぞろに下りていた。

「おすこやかにおわしませ。」

筒井は誰に行うとなく頭をさげて拝した。なぜにもっと早くにもどって来てくださらなかったのかと、筒井はものの終りへささげる言葉を心につぶやいた。

青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 上」作品社

1982（昭和57）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「津《つ》の国人《くにびと》」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2014年3月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

津の国人

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>